

オオハク (cy・cy) コハク (cy・co) の嘴峰像による識別私法

(第 二 部)

三 上 士 郎

当会発行の「日本の白鳥」163に述べた私の第一部につづく、cy・co II型及びダイヤモンド型cy・coを記す前に、第一部のミスプリントを訂正する。

- (一) 9 ページ 左 15 行目 「白鳥失敗記」の次「など」は「として」
- (二) 10 ページ 右図説明「165」は「163」
- (三) 12 ページ 左 12 行目「アンケート」は「アート」

四) 「今迄の例では得られていない」の次入れる。これは今後の観察に俟つもので、其後小川原湖で屢々プロミナーで眺めている。中海、猪苗代、伊豆沼には一杯この種のものがあるので、同地へ赴いてみるか、剥製・写真等によってこれを示して下さる方があれば幸甚である。

「本論」

- (3) 「コハク cy・co II型」について

私が「野鳥」に発表したcy・cy cy・coの正面像の識別法の中での最大の誤りは、実にこれであった。即ち正面からみて、黒・黄白(頭羽)と三段に分れるものを私はすべてcy・cyとして取扱ったのであるが、当時、中海での白鳥観察がようやく地元の人々の注目を引くようになり、それがcy・cyか、cy・coかという点に追求が進んで行った。これには、まづ利法が取り上げられたのである。言うまでもなく、鳥根県の県民の鳥は、「オオハクチョウ」となっているのだが、こ

の為にも該地のものがcy・cyかcy・coかを判定しておくことは大切なことでもあったろう。

たまたま、昭和43年8月、安来市の岩田正俊先生が学会で、当県弘前市に御出張の折私宅を態々訪問され、右の黒・黄・白の中でも、鼻腔が黒の中に埋もっている亜成鳥(頭部にのみ黒点を有する)もの、写真を呈示されたのである。

(「しまね野鳥」拙文「白鳥失敗記」

写真 (D)(D')(D'') 参照)

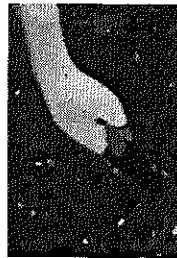
私は一瞬ギクリとした。正しくcy・coである。嘴裏面は黄が主体で、喉部より僅かに

黒が嘴尖に向って出ている。

その後、図(1)(2)(3)の如き成鳥のものに屢々遭遇することになり、その嘴峰裏面もcy・cy同様黄なることを認めた。幼及び亜成時代の喉部より嘴尖に放射する黒条は消失するものようである。



(1)



(2)



(3)

幼の正面像は写真(4)(5)(6)の如く、嘴尖のみ黒。将来黒化する部分は、上部に向かって肉色。



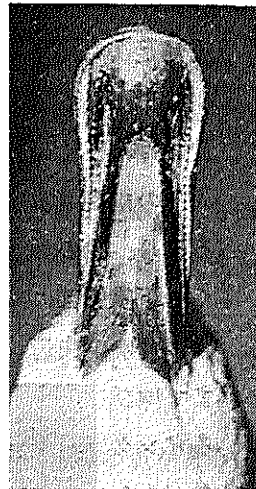
(4)



(5)



(6)



(7)

次に淡黄白色、頭部の白部に移り、裏面は、(7)の如く。喉に近い部からやはり尖端に向う淡黒色がみられるが、これは既述の通り、成になるに従い消失するものゝ如くである。

(4) cy・co コハクの中の所謂ダイヤモンド型



(8)

写真(8)(9)(10)(11)の如く、嘴尖より頭部に向う黒帯の頭部に近い方に、菱型の黄を有するタイプのものである。これは、前三者と混在し、その出現頻度も可成り多い。鼻腔が黒の中に埋もり



(9)



(10)

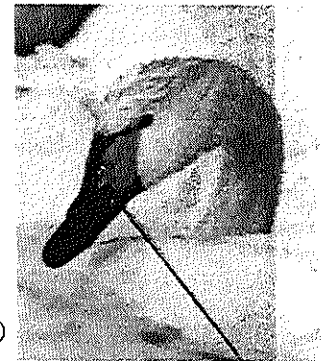
一般 cy・co の如く、横面像に於て嘴尖下部により頬に至る黒条が、喉部に至って 状に終わっているものである。(14)(15)



(11)

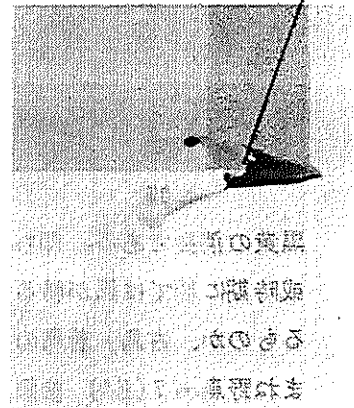
又、(12)(13)の cy・co の如く、鼻腔にひきつゞき頭部に向かって黒の突起を有するものもある。

(後記 Bewi Jank の差参照)

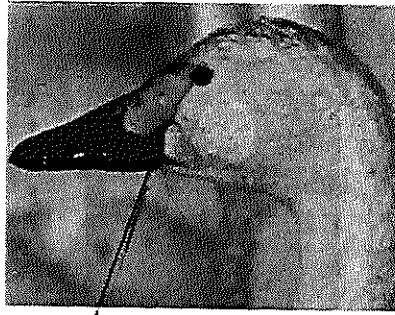


(12)

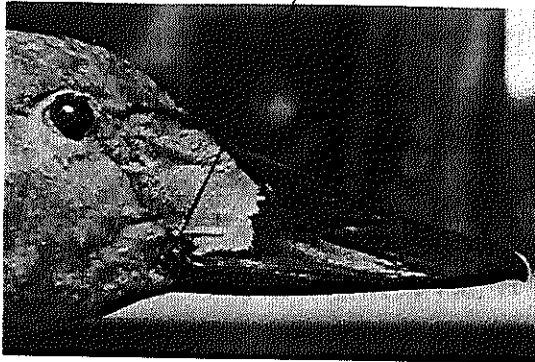
尚、cy・cy の中にも(19)の如く、ダイヤモンド型を有するものもまゝ見受けるが、この鑑別は、側面像に於て容易である。



(13)



14



15



19

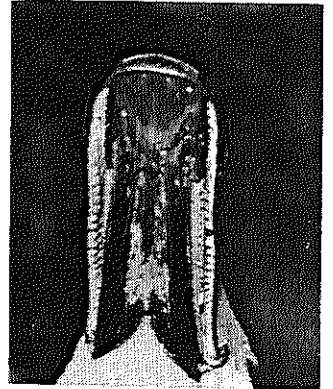
何よりもこの cy・co ダイヤモンド型に於て興味あるのは、その嘴峰裏面像である。

即ち、私の8年間の此の型の傷鳥飼育例

20 21に於て見らるゝ如く、その

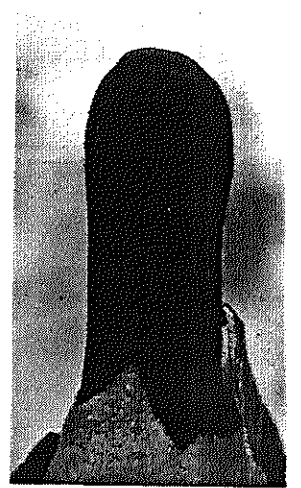
黒黄の消長である。即ち或時期には黄が勝り或時期に於ては黒が勝るのは、飼育飼料によるものか、古鳥・若鳥の差によるものか(しまね野鳥167(E') 参照)不明であるが、これからの課題としたい。ただ、これをもって

すれば、cy・co のⅠ型、Ⅱ型に於てもこれに類した事象が認められるかも知れない。いづれにしても、白鳥の黄部に存在する黒点、斑、条は再言する如く、極めて不安定なるものであるという事だけは確かのようなのである。



20

S 52. 4月



21

S 52. 4月

(補足)

(一) 尚 cy・co に於ては、多くの人々の指摘さるゝ通り、22の如く、下嘴側部に喉より嘴中央辺まで伸びるピンク条がみられる。



22

(二) 20は、松江の根岸啓示氏から提供

を受けたものだが、写真にみられるように、後列の二成鳥の cy・co Ⅱ型と、同型の幼5羽が並んでいる。この5羽は、右の二成鳥の♀の一腹の仔と考えられる一ファミリエーを示している。

ただ根岸氏によれば、右下にみえる cy・co Ⅰ型一羽も常にこれら7羽と常に同一行



23

動をとっているということから、これもこの7羽一群の中に加わり、家族の蕃殖にあづかったのではないかという疑問も起る。しかしこれは矢張り前者のものだけに限ると見た方が正しかろう。尚、根岸氏によれば、この一羽のⅠ型のもは垂成鳥ではないかということだが、これが生殖力を持たない垂成であるかどうかは不明である。

但し、Ⅰ型とⅡ型の間交配が起こらぬことは保証し得ず、これも今後の展開を俟ちたいと思う。

(三) 最後に(Ⅱ)型の cy・co に於て、かつて当大湊へ一時停留して行ったもの(5羽)の中の3羽の側面像について未記載の点があるので指摘する。

即ち、24に於て中央の1羽の如く側面の黄型を形作る黒色が、完全な「オオシウハクテウ」*cygnus (olor) columbianus bewichii yarrel* (黒田) であるのに反し、



24

左端、右端のものはその黒が、きり立ち方が鈍ぶくなく、多少の凹凸をもっているものもある。後者がいわゆる日本渡来の *Janhonshii Alpheraky* なものかどうか、非才にして私は未だ成書に記載されていないと思うのだが、此の点の明快な教示を得ることが出来れば幸甚である。

尚、右屢述べてきた私の cy・co Ⅰ型への正面像による cy・cy との鑑別法は、たとえ種々の右の如く不備な点を残してはいるが繰返し申し上げる通り、例えば不鮮明な写真に於て、或いは、TV・映画等の瞬間的捉え方に於て、自画自讃になるが、尚その価値を失わないと確信する。

即ち白鳥群をみて、その中に一つでも識別容易な私の所謂 cy・co Ⅰ型のをみたならば、これらの中にはそのⅡ型、ダイヤモンド型等が含まれているなという考えをもってプロミナーで今度はその実態にとり組まれるよう、特に cy・cy cy・co の区別のはっきりしない方々におすすめる。

尚、今後又、新たな知見を得ればこれらを逐時紹介してゆきたい。各位の御助言を得れば幸せである。 (昭52. 4. 30)